蜂起的アナキズムについてノート

蜂起的アナキズムについてノート

（アメリカの Killing King Abacus 誌から翻訳された）

蜂起的アナキズムは全ての社会問題に対するイデオロギー的な正解ではなく、イデオロギーと意見の資本主義の市場の一つの商品ではなく、代わりに国家と資本主義の存続を止めるという狙いのある前進のための分析や議論の必要な不断なプラックシス（**実践**）である。われわれはいくつかの理想的な社会を見ず、また公的な消費のための理想郷のイメージを申し出ない。史上アナキストはほとんど、社会が国家を自動的にはき捨てられる進化させられたほどのことを信じている人を除いて、蜂起的アナキストであった。要するにこれが意味するのは国家が自動的に消え去らない、従ってアナキストが攻撃する必要がある座して待つのは敗北であり、必要なものは搾取された者たちや疎外された者たちの間に開かれた反逆であり破壊の燃え広がることである。われわれやほかのいくつかの蜂起的なアナキストたちは国家が自動的に消え去らなければどういうふうにその存在を終わらせるかという一般的な問題から下した結論を本文説明する。だからこういうのが実践であり、攻撃の組み立て方を集中するのである。このノートが締め切りまたは完成品ではなくて不断な議論の一部になることを望む、またわれわれは確かに反駁を歓迎する。以下の大分が「インスレクション」という雑誌のバックナンバーと「Elephant Editions」という出版社の小冊子からのものである（ウエブ

ページにある Insurrection ページに参考するまたは連絡ください)。

１．国家は単に消え去らない攻撃しろ

－多くのアナキスト達が信じてきたようのに対して資本の国家が単に「消え去る」わけではなくて、ただ空論の「待つ」姿勢を固く守ってしまっただけではなく公然と新世界の作ることが古い世界の崩壊が必要である人の行動を責めるほど人もいる。仲立ちやなだめることや犠牲や和解や妥協のすべての拒否が攻撃そのものである。
－宣伝がどういうふうに行動するのかを明確する役割を持っても宣伝ではなくて行動と行動を習うことこそを通して蜂起への道を開こう。待つことは待つことを教えることのみならず、行動することを通して人は行動することを学習する。
－蜂起の力は社会的なものであり、軍事的ではない。一般的な反乱の重要性の尺度が武力の激突ではなく、一方で経済および普遍性の麻痺状態の程度である。

2. 操作された反乱対自己活動、蜂起から革命へ

－アナキストにとっては革命がわれわれが行っていることもしくはかかわっている問題のどれもが不変的な基準点である。しかし革命は基準点とするように簡単に使われる作り話ではない。特に具体的なイベントだからこそ、真に社会革命のすべての開放的な性格を持っていないよりおとなしい試みを通して日常的に建てられなければならない。これらのよりおとなしい試みが蜂起といえよう。その中でもっとも搾取された者たちや疎外された者たちともっとも政治的に除外された者たちの決起が革命へ導きうるかもしれない反乱の流れにおいて参加している搾取された者のだんだん広がっている層の可能性の道を開く。
－長期と短期の両方で闘いが発展しなくてはいけない。明確な戦略には調整と実りのあるふうに違う方法が使われることが必要である。
－自主的な行動というのは闘いの自主管理が意味する闘う者が自分の決意と行動においての自主的なものであり、これが常に闘争を制しようとする総合向け組織のその反対のものである。単一管理組織の中において同一化された闘争は簡単に現在社会の権力構造に統合される。自主管理の闘いは社会的地形を横断して広がっているところの自然に管理されえないものによって存在する。

3. 管理された反乱ｖｓ非管理＝闘いの広がり

－決して闘争の進展は前もって分かり得ない。限られた闘争の成り行きでもいかに期待されなかった結果もあるかもしれない。いろんな蜂起（限られたのでも）から革命までの過程は何の方法に通しても前もって保証できないわけである。
－体制が恐れているのはサボタージュの行動自体より、それらの社会的な拡散である。一人でまたはほかの人と一緒に持たざるプロレタリア化された各個人にでも目的を作成できる。国家と資本が社会領域の全体を動かせる管理の機関を監視するのは物理的不可能である。本

当に管理の網と戦いたい誰もが理論的・実践的な貢献できる。サボタージュの拡散が最初の断たれたつながりの現われに伴う。名もなき社会的自己解放の実践がすべての分野にも拡散することができ、権力に置かれた妨害のコードを乗り越えることができる。
－複雑な方法の要らない小さな行動（だからコピーしやすいの）は単純や自発性だけで抑えがたいものである。こういうものは反暴動の最新的な進展をもあざけり笑う。

4. 永久的闘争性ｖｓ機関的な権力との調停
－権力に対する闘争で闘争性が不変な要素として考えるべきである。この要素に欠ける闘争が機関の権力との調停を押し進めさせられる、代理することや幻想的な国会の命令によって行われた解放を信じる癖になれてきて積極的に自分の搾取に参加するほどにまでなってしまう。
－個人的には暴力的な方法を使って自分の目標を果たそうとすることを疑う理由があるかもしれない。非暴力が不可侵の主義になるように昇華されてくるとき、現実がよいものとわるいものの二つに分けられると弁論の持つ価値が停止される、そしてすべてのものが従属と服従の条件で見えてくる。反グローバリズム運動の主流派は他者から離れて他者を口撃することを通して特に一点を明らかにした、彼らの主義（彼らにとって義務）が運動のすべての民衆の力の権利として考えるわけである。

５．不正、蜂起は銀行強盗のみにあらず
－蜂起的なアナキズムが生存の道徳ではない＝資本とよく妥協して社会的な役割や自分の才能とテ―ストによっていろんな方法を通して皆が生きている。生きると自分のプロジェクト

を実行するまたは続けるように給料奴隷制から解放するのに法に拘束されない方法を使うのは無論道徳的に反しない、しかし法に拘束されない主義を事物にすることまたは殉教者のある種の宗教にさせることはしない、それは単なる方法であり、しかもたびたびよい方法である。

６．プロの革命家や活動家ではなく永久組織でもなく、インフォーマルな組み立て方

党・組合から自主組織

－革命運動内に深い相違がある＝アナキストの闘いの質への動きとその自主組織に対して権威的な量と中央集権化への動きである。

－インフォーマルな組み立て方は具体的な作業のためであり、だから党やシンジケートや永久組織が闘いを統合することが資本と国家の総合用の要素になるゆえに対峙する。それらの組織の目的がそれらの存在自体になる、最悪の例は最初に団体を作りそして闘いを見つけまたはそれを作る。行動することが我らの作業であり、組織が方法である。だから、ある団体へ行動と実践の代弁することに反対して、操作された闘いではなく「**蜂起へ導く一般的な行動が必要である**」。組み立て方はある民衆の利益を防衛するためであるべきではなくある利益を攻撃するものである。

－インフォーマルな組み立て方はいくつかの共通の親和性を持っている同志たちを基礎とする、こういう推進的な基礎は常に行動である。これらの同志たちが突き当たる問題の範囲が幅広くなるのに伴って親和性が深くなってくる。つれて、新の組み立て方はともに行動する

ことの効果的な許容量すなわち互いに発見し合うところを知ることやともに問題の学習と分析を共にすることそして行動を経験することのすべてが作った親和性にかかわって行われるわけであり、目論見や綱領や旗もしくは偽装された党のいろいろの類に全く関係ないわけである。ゆえに、インフォーマルなアナキスト組織は共通の親和性に結集する特定な組織である。

少数のアナキストと搾取された人と疎外された人：
－われわれは搾取された人と疎外された人の一部分だから行動することが我々の作業である。でもすべての大きい可視の社会運動の一部ではない行動を「無産者のかわりに行動すること」と非難する人もいる。かれらは行動の代わりに分析と待つことを勧める。搾取された人と共に搾取されないと仮定するならば、自分たちの欲求と自分たちの怒りと弱みが階級闘争の一部ではないという。これはたった搾取された人と反乱分子のもうひとつの思想的分離以外のなにものでもない。
－こういう積極的なアナキスト少数が数の奴隷ではなく搾取された社会層では階級的な衝突が低いレベルにあっても権力に対する行動を続ける。だからアナキストの行動の狙いは闘いを貫徹するように莫大な組織で階級の全部を組み立って守備することではなく闘いの一部一部を見分けてそれらの闘いの終わりまで貫徹することである。偉大な大衆闘争のイメージや全部を支配して全部を管制するある運動の無辺拡大から離れる必要がある。
－搾取された人と疎外された人との関係は時を刻むことを我慢する必要のある何かとして組み立てられることはできない、すなわち搾取者の攻撃に対する反撃や無辺拡大を基礎にするわけにはいかない。この関係はもっと縮められた特定な次元を持たなきゃいけないというのはすばり後衛ではなく攻撃の関係である。
－反乱の態勢が現出できるふうにまたは潜在的な争いが発展できるように浮かび上がるように自分の闘いを建て始められる。こういうふうに闘いが発展できる特定な状況とアナキストの少数の間の連絡が付けられる。

７．個人と社会＝個人主義と共産主義、偽な問題

－個人主義の強みと共産主義の強みを抱え込む。

－蜂起は個人たちが窮屈な管制された事態から沸きあがる意欲と勝手に自分の人生を作る技能を再び我が物にするのから始まるわけである。それをするには彼らと存在の事情との分離を打ち勝つのが必要である。特権のある少数が存在の事情を管制するところでは個人の大分が自分の存在を本当に自分の条件で決めることは可能ではない。存在の条件をアクセスの同等さが社会の事実のみで個人性が栄えられる。このアクセスの同等さは共産主義であり、個人個人がそのアクセスをどう使うのはその一人一人次第である。だから、ほんの共産主義では個人どうしの同等さとアイデンティティという含意はない。我々は肝胆の同等さに押しつけられるのは現在の仕組みに敷かれた社会の役割である。個人性と共産主義どうしになんの矛盾もない。

８．我々がその搾取された人、我々がその矛盾、これが決して待つ時機ではない

－確かに資本主義は調整と展開との方法へ駆り立てる深い矛盾を持っていますけれども、自分たちを揺りかごに入れてこれらの危機を待つわけには行けない。そういう危機が起こったら蜂起の過程を加速する必要に応じたら歓迎される。しかし、搾取された者として我々が資本主義の基本の矛盾そのものである。従って蜂起の機がいつも熱した、ついでに国家の存在は歴史のいつの間にでも人類によって終われさせられたということもいえる。搾取と圧迫の機構での断絶させることはいつも可能であった。